

妖怪から読み解く身体観

安井眞奈美^{†1}

本発表では、国際日本文化研究センターの「怪異・妖怪伝承データベース」(<http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiDB/>)に所収されている怪異に関する膨大なデータの中から身体に関するものを集め、各身体部位に分けて分析を試みる。それを踏まえ、妖怪・怪異に狙われやすい身体部位を紹介し、そこにどのような身体観が表現されているのかを明らかにしたい。また、天理大学の学生たちの創作によるオリジナルの妖怪から、現代の若者たちの身体観を探る試みについても紹介したい。

The notion of the body decoded from *yōkai* (ghosts, monsters, spirits)

MANAMI YASUI^{†1}

This presentation aims to select data regarding the body from the huge database on “Folktales of strange phenomena and *yōkai* (ghosts, monsters, spirits)” (<http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiDB/>) maintained by the International Research Center for Japanese Studies, and to conduct analyses for each part of body. Based on the results, those body parts thought vulnerable to attack from *yōkai* will be identified, and from this the author seeks to clarify the notion of the body being expressed in folklore. Also, an attempt to understand notions of the body among the younger generation will be introduced using original images of *yōkai* created by students at Tenri University.

1. はじめに

本研究は、国際日本文化研究センターの「怪異・妖怪伝承データベース」(<http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiDB/>)に所収されている怪異・妖怪に関する膨大なデータの中から身体に関するものを集め、妖怪に狙われやすい身体部位、怪異現象の起こりやすい身体部位について考察し、人々の身体観を明らかにすることを目的とする。

1.1 分析に用いるデータ

本研究では、国際日本文化研究センターの「怪異・妖怪伝承データベース」(<http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiDB/>)に所収されているデータを用いて分析を行う。

「怪異・妖怪伝承データベース」は、「データベース概要」によると「民俗関係の調査などでこれまでに報告された怪異・妖怪の事例を網羅的に収集して、その全体像を把握することを目的」に作成されたもので、2007年6月の更新時点でのデータ数は35,701件である。以降、現在に至る。

データの出典となる書誌は、「収録データ」によると「竹田且編の『民俗学関係雑誌文献総覧』(国書刊行会、1978)(以下『総覧』)に記載された民俗学雑誌を網羅することに加えて、『日本随筆大成』第1期～第3期(吉川弘文館、1975-78)(以下『大成』)、民俗編のある都道府県史、柳田國男『妖怪名彙』からも怪異伝承を採集することにした。これによって、近世から現代の怪異伝承の事例を、幅広く集めることができるのではないかと考えている」とされる。

1.2 検索に用いる身体部位の名称

次にこのデータベースを用いて、身体部位の名称による検索を行った(1)。検索に用いた身体部位の名称は、『大辞林』(1988、三省堂)の「からだ(身体)」の項目を参照した。この項目には、医学、解剖学用語(眼球・臀部など)や俗語、幼児語、女性語の類(ヒザコゾウ・オッパイ・オデコ・オナカ)、古語(コウベ・ヌカ・ノミト)などを除外し、現代日本語でよく用いられる代表的な身体名称が示されているからである。それらを参照し、以下に示す37の身体部位について検索を行った。

検索を行なった身体部位の名称

<大区分>頭・胴・手・足

<中区分>頭——ヒタイ(額)・マユ(眉)・ハナ(鼻)・ホオ(頬)・クチ(口)・ミミ(耳)・アゴ(顎)
胴手足——クビ(首)・カタ(肩)・ムネ(胸)・ウデ(腕)・ハラ(腹)・マタ(股)・スネ(脛)・セナカ(背中)・コシ(腰)・シリ(尻)

<小区分>頭——コメカミ・クチビル(唇)

胴手足——ノド(喉)・チブサ(乳房)[チチ・乳]・ヒジ(肘)・ヘソ(臍)・ユビ(指)・ヒザ(膝)・ツマサキ(爪先)・スネ(脛)・ウナジ(項)・ボンクボ(盆の窪)・ワキ(脇)・テノヒラ(掌)・カカト(踵)

<その他>髪

^{†1} 天理大学文学部歴史文化学科考古学・民俗学研究室
Department of Archaeology and Folklore, Tenri University

1.3 ヒット数とデータ数

これら 37 の身体部位をキーワードとしてデータベースの検索を行い、得られた数値を身体部位の「ヒット数」とした。しかしデータベースの性格上、たとえば「手」というキーワードによって検索すると、「手助けする」「手柄をたてる」のように「手」という語を含んだ慣用句や、「助手」「手腕」といった「手」を用いた熟語もすべてヒットすることになる。そこで次に、身体部位としての「手」という意味で用いられたデータだけを集めるために、ヒットしたすべてのデータに目を通して取捨選択を行った。その後、得られた数値を「データ数」とし、この「データ数」によって順位をつけた。各身体部位の「ヒット数」と「データ数」は表 1 に示したとおりである(2)。

またデータ数によって各身体部位の順位を棒グラフに示したのが図 1 である。データ数の多い身体部位は、「足・手・目・頭・首・髪・腹・背・尻・耳」である。各身体部位のデータ数を、身体図に挿入したのが図 2 である。この図は秦恒平『からだ言葉の本付き “からだ言葉” 拾遺』(3)を参照して作成した。

これらのデータ整理によって、「足・手・目・頭・首・髪・腹・背」などの身体部位が、妖怪・怪異現象が起きやすい身体部位、つまり妖怪・怪異に狙われやすい身体部位と捉えることができるだろう。

1.4 妖怪が攻撃する身体／妖怪の身体

上記の内容に加えて、本来なら、さらにデータの絞り込みが必要だと言える。なぜなら、「ヒット数」から絞り込んだ「データ数」のデータの中にも、依然として多様なデータが混ざっているからである。たとえば、「目」という身体部位に注目してみると、「ムンに目をぬかれる」(カード番号 1610205) という見出しのデータには、急に涙が出てきて目が真っ赤な状態になることを「ムンにぬかった」と言う、とある。目の異常は、妖怪・怪異現象が原因であると見なされていたことがわかる。この他、「目」という身体部位の数多く事例は、「一ツ目小僧」のような妖怪の名称およびその特徴を表現したものである。「一ツ目小僧」(カード番号 1232561) というデータには、「2月 25 日に山に行くと一ツ目小僧に化かされるといわれている」という。このように前者は「妖怪や怪異に攻撃される身体」であるのに対し、後者は「妖怪の身体」とでも呼びうる現象の表現である。もしもこの点をクリアにできれば、どのような身体部位を強調したり、欠損させたりすれば妖怪を創り出すことができるのか、という興味深い課題に取り組むことができるだろう。しかし、両者のデータ、つまり妖怪が攻撃する身体の情報と、妖怪の身体についての情報は互いに絡まり合っているため、容易に整理することは困難である。従って今回は、このような性格の異なるデータが含まれていることを指摘しておくに留めておく。

表 1 身体各部位のデータ数

	部位	ヒット数	データ数
1	足	945	854
2	手	1357	564
3	目	630	548
4	頭	842	531
5	首	480	394
6	髪	344	326
7	腹	376	312
8	背	357	289
9	尻	301	279
10	耳	181	149
11	鼻	157	118
12	指	207	113
13	腕	112	85
14	脇	65	65
15	口	82	64
16	胴	59	59
17	肩	57	57
18	胸	70	52
19	股	79	47
20	喉	63	46
21	額	60	40
22	膝	30	27
23	掌	37	27
24	眉	28	24
25	臍	22	21
26	頬	19	18
27	唇	14	13
28	乳	89	13
29	脛	10	10
30	踵	8	8
31	顎	5	5
32	腿	3	3
33	肘	3	3
34	盆の窪	2	2
35	こめかみ	1	1
36	爪先	1	1
37	うなじ	1	1

出典 [安井 2009;247]

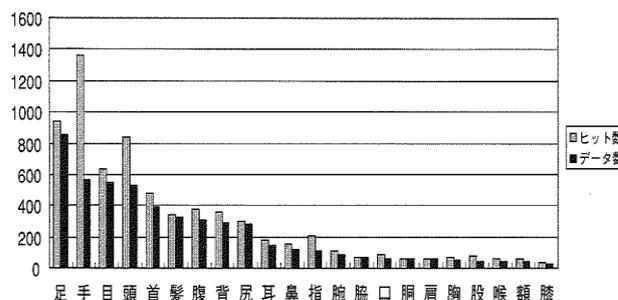


図 1 身体の部位別怪異・妖怪伝承データ数 (上位 20)

出典 [安井 2009;247]

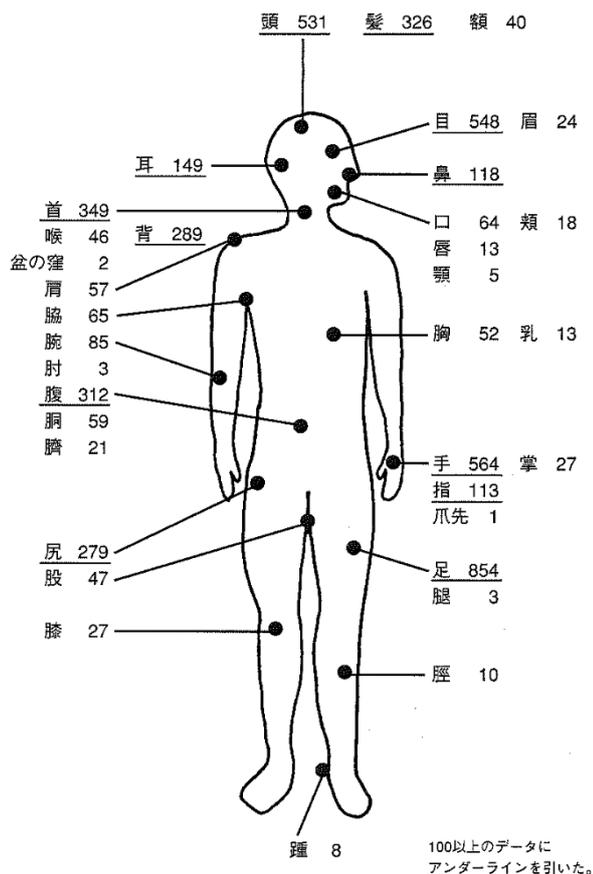


図2 身体部位のデータ数 [安井 2009 ; 248]

2. 攻撃されやすい身体部位

発表者はかつて、妖怪に攻撃されやすい身体部位、怪異現象の起こりやすい身体部位について、身体の開口部とも言うべき「目・鼻・口・耳・性器・肛門・毛穴」といった身体部位の分析を行った(4)。その結果、身体の開口部だけではなく、身体の閉じた部分、つまり背中などの身体部位も、妖怪に狙われやすいことが明らかとなった。直立二足歩行する人間の両眼は顔面に並んでついているため、自らの背中では死角になりやすい。それにもかかわらず、背中では常に他人の視線に曝されている受動的な身体部位である。つまり、背後で何が起きているかすぐに確認できない無防備な身体部位であるからこそ、背中では怪異に遭遇しやすいのではないかと考えられる。このようにして、他の身体部位についても考察を進めたい。

3. 妖怪の身体性

妖怪の身体性を考えるにあたって、次に目の妖怪に注目してみたい。代表的な目の妖怪として、「一ツ目小僧」が挙げられる。一ツ目小僧についてはすでに柳田国男が、「大昔いつの代にか、神様の眷属にするつもりで、神様の祀りの

日に人を殺す風習があった。おそらく最初は逃げてもすぐ捉まるように、その候補者の片目を潰し足を一本折っておいた。そうして非常にその人を優遇しかつ尊敬した」(5)と指摘し、神への生贄という一ツ目小僧の起源説を展開する。片目を潰し、あえて身体の欠損状態をつくるのは、妖怪の誕生の背後に潜む暴力と差別を暗示させる。

柳田が指摘したような目を潰す行為は、その人物の力を奪い、神に捧げる生贄にするものであった。それは、人間の目が睨みをきかすことで相手を威嚇できる、能動的で攻撃的な身体部位であることと関係しているのだろう。人類学の研究が明らかにしてきたように、凝視するだけで他人に危害を加える邪視もまた、目の力と言える。

そのような目のもつ力、人間にとっての目という身体部位のもつ重要性を踏まえた上で、妖怪「一ツ目小僧」が生み出されたということもできるだろう。

その一方で、目をたくさんもつ「三ツ目」などの妖怪も作られている。こちらは、身体部位を過剰に強調した妖怪ということができるだろう。

4. 学生たちの創った妖怪から身体観を探る

筆者は数年前から勤務先の天理大学にて、学生とともに妖怪を創るワークショップの授業を行ってきた。自分で妖怪を考え、名前をつけてその特徴を示す、という簡単なものである。この際、学生たちには、妖怪とは「人間に否定的に把握された不思議現象」(6)と説明している。すでに数多くの妖怪たちが筆者の手に集まっており、これらの妖怪についても分析し、現代の若者たちの身体観にも迫りたいと考えている。学生たちの創った妖怪の一部は、拙稿にて以下の4タイプに分けて分析を行った(7)。

- ① 身近に起こる不思議な現象を捉えたもの
- ② 自分の内面にある、コントロールできない何かを妖怪に見立てたもの
- ③ 社会の規範、モラルに反する逸脱行為を妖怪に見たもの
- ④ 世直しへの期待を込めたもの

これらの分類については拙稿をご参照いただくこととして、本発表では学生の創った妖怪から、とくに身体に関連するものを、いくつかの事例とともに紹介したい。

学生の創った妖怪の中について強調された身体部位として、目・唇・顎・手などが挙げられる。たとえば目の場合、いくつもの目を並べた妖怪や三ツ目小僧など、身体部位を過剰に強調して創り出されたものもあれば、一ツ目小僧のように、身体部位を欠如させて創った妖怪もある。

これに対して、身体部位そのものではないが、視線を感じさせる妖怪がいくつかみられる。学生の創った妖怪である、「すみっこ太郎」と名づけられた。「気がついてくれるまで、部屋のすみっこで、ただひたすら人間(左手前)を

見つめている妖怪。気がつけば、ちょっとした幸せが訪れる」という。「右と左、どちらが妖怪なのか？」と思わせるイラストだが、つぶらな瞳で「じーっ」と見つめるこの妖怪は、目が強調されていると同時に、「かわいい」妖怪として描かれている。注目したいのは、身体部位としての目だけではなく、「じーっ」と見つめる視線が強調されている、ということである。何か妖気を感じる、気配を感じる、というのは怪異現象の一つであるが、それを妖怪の視線で表現している点が興味深い。このことから、現代人は常に人の視線を気にしている、と解釈することも可能だろうが、これについては近世から近代の妖怪と比較するなかで考えてみたい。

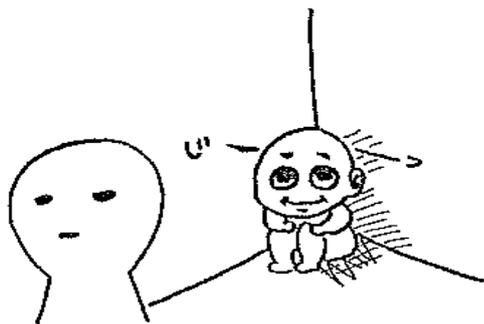


図3 学生の創った妖怪の例

発表者は、これまで学生が創った妖怪を整理、分析している最中である。妖怪を創り出す際に、身体部位を誇張・拡大したり、またその逆に欠損状態を産み出したりするなどの、いくつかの操作が考えられる。また、妖怪を創り出す際の重要な手法である「擬人化」が、どのように作用しているのかも、検討してみたい。小松和彦が『百鬼夜行絵巻の謎』で指摘したように、妖怪を創る際に「擬人化」はきわめて重要な手法であるからだ(8)。

こうした点を加味して身体観を探る場合、

- ① 擬人化という表現の方法
- ② 身体の一部を過剰あるいは欠損させて表現する方法などがみられる。

これらの表現方法に注目し、怪異・妖怪伝承のデータを用いながら、引き続き身体観を探っていききたい。

謝辞

身体各部位の検索およびデータの整理については、国際日本文化研究センターの山田奨治教授のご協力を得た。この場を借りて感謝申し上げる。

参考文献

- (1) 安井真奈美：妖怪・怪異に狙われやすい身体部位——日本人の身体観の解明に向けて、怪異・妖怪文化資料を素材とした計量民俗学の構築と分析手法の開発に関する研究（平成15年度～18年度科学研究費補助金（基盤研究(A)）研究成果報告書 研究代表者・小松和彦国際日本文化研究センター教授 課題番号15202026
- (2) 安井真奈美：妖怪・怪異に狙われやすい日本人の身体部位、小松和彦編、妖怪文化研究の最前線、せりか書房、pp.244-268(2009)
- (3) 秦恒平：からだ言葉の本付き“からだ言葉”拾遺、筑摩書房、p.3(1984)
- (4) 安井真奈美：狙われた背中——妖怪・怪異譚からみた日本人の身体観、小松和彦選暦記念論集刊行会編、日本文化の人類学／異文化の民俗学、法蔵館、pp.3-17、696-714(2008)
- (5) 柳田國男：一目小僧その他、柳田國男全集7、筑摩書房、p.426(1998)
- (6) 小松和彦：妖怪学新考——妖怪からみる日本人の心、洋泉社、p.47(2007)
- (7) 安井真奈美：現代の妖怪と名づけ--「かわいい」妖怪たちと暴力をめぐる、小松和彦編、妖怪文化の伝統と創造--絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで、せりか書房、pp.585-603(2010)
- (8) 小松和彦：百鬼夜行絵巻の謎、集英社新書ヴィジュアル版、p.202(2008)